



# 「下村満子の生き方塾」ニュース

vol.30 2022.08

—2021年9月 田中光敏監督トークショー特集号—



## 理屈抜きで動くこれが大事

——映画「天外者」に焦点当てて



「天外者」をテーマに対話する下村塾長と田中監督

「下村満子の生き方塾」は2021年9月18日、東京・五反田の城南信用金庫本店で、映画監督の田中光敏さんを招いて、監督の最新作「天外者（てんがらもん）」のトークショーを行いました。「天外者」は幕末から明治初めの激動期に生きた薩摩藩士・五代友厚を主人公に、五代を取り巻く若者たちの生きる姿を描いた歴史ドラマであり、また人は何のために生きるのかに焦点を当てた人間ドラマでもあります。五代を演じた三浦春馬にとってはこれが最後の映画でしたが、監督は「『天外者』は、春馬が全てを出し尽くした完全燃焼した作品でした」などと、述懐しました。下村塾長との対談では、映画製作現場の裏話も披露したほか、映画製作の予定についても触れました。この日は台風14号接近の最悪コンディションでしたが、映画に対する監督の熱い思いがひしひしと伝わるトークショーでした。

(文・写真・構成/皆川猛)

## 田中監督 最高の芝居をしてくれた三浦春馬はもういない

### ● 吉原さんの尽力で会場確保

下村塾長の「台風の中、こんなに多くの方が来場していただきありがとうございます。『生き方塾』は例年、夏合宿をしていますが、今年はコロナのために実施できませんでした。合宿に代わるものとして、田中監督にトークショーを引き受けてほしいと打診したところ、お忙しいスケジュールを割いていただき、本日の開催となりました。監督は『生き方塾』の応援団であり、5年前には福島県郡

山市で田中監督作品の映画『海難1890』上映会とトークショーを開催させていただき、大変感謝しております。会場のここ城南信用金庫本店講堂は、応援団である吉原毅様（元理事長）をお願いして、貸していただきました。吉原さんは城南信用金庫の理事長を務めた方であり、吉原さんの尽力がなければ、会場確保はできませんでした。重ねてお礼を申し上げます」との挨拶で開会しました。

この後、吉原さんが「名監督として著名な田中光敏監督

を招いたトークショーの会場に、城南信金を選んでいただき、うれしい限りです。最後まで楽しんでください」と話をし、続いて田中監督が「天外者」について、次のように説明しました。

**田中監督** 「天外者」とは薩摩（鹿児島県）の方言で、天から授かった子どもとか、とんでもないことをしでかす人、などといった意味があります。幕末から明治初期に活躍した五代友厚に焦点を当てた映画ですが、主演を演じた三浦春馬はもう亡くなり、この映画を見ることはできませんでしたが、彼は最高の芝居をしてくれました。製作スタッフも皆、持てる力をいかに発揮してくれました。三浦が映画の中で語る「地位か、名誉か、金か。そうではない。目的だ」の言葉こそ、全世界で求められていることだと思います—



開会あいさつする下村塾長



会場確保に尽力した吉原さん

田中監督  
トークショー

## 映画作るのはスタッフ全員のだ

### ● 50館配給から280館へ

「天外者」の上映開始は2020年12月1日からでしたが、春馬は完成作を見ることなく昨年7月に亡くなったことが非常に残念でなりません。コロナ禍のため、この映画は公開できるかどうか、瀬戸際にありました。ひょっとしたらお蔵入りするのではないかと思ったほどです。

振り返ると、コロナ禍の第二波が一時的に落ち着いた昨年秋、配給元は試写会を行いました。すると評判が高かったのですが、コロナは第3波が押し寄せたため、配給元は全国50館への配給を考えました。しかし、試写会に行った人たちはネットでいい映画だと絶賛したことから、全国の映画館から「うちにも配給してくれ」との要望が殺

到。全国280館で公開されました。

映画は監督が作るものだと思われていますが、そうではありません。スタッフ全員で育てられ、完成するものだというところを、この「天外者」であらためて実感しました。コロナ禍で撮影が1年待ちになり、そのことを春馬に告げたら、彼は快く了承してくれました。

彼にとって時代劇は初めてだったので、この待機の1年間、彼は侍走り、刀使いなどをしっかり訓練していたのです。殺陣（たて）は初めてなのに、重い刀をしっかりと振って止める。この技は力仕事なのに難なくこなしていました。人に知られることなく、殺陣師について習っていたのでした。作品のために体を鍛えていました、と語っていたことを思い出します。

## シナリオのヒントをくれた下村塾長

私は大阪で大学生時代を過ごしたので、大阪の産業を興した五代のことは、ぼんやり知っていました。市内のあちこちに五代の銅像が立っていましたから。五代をやってくれとオファーがあってから5か月後、五代プロジェクトを立ち上げました。それから彼についての勉強を始めました。

下村さんからは「今のリーダーたちは、今だけ、金だけ、自分だけの生き方をしている」という話を聞いていたので、これをヒントにシナリオを書きました。五代は下村さんの話とは逆な生き方をしていました。春馬には「五代は普通の人間で、利他の心の持ち主であることを演じてほしい」と頼みました。

若い志士たちの青春群像を描きますから、若い俳優を登用したいと、製作委員会に申し出ましたが、なかなか取り合ってくれませんでした。若い人たちがこれからの日本映画界を引っ張る、と説得しました。ですから、私はこの映画製作で、若い人たちからやる気をもらいました。

これまでの五代は北海道開拓で汚職をした汚い政商と言われていましたが、近年は、それは間違いという史料が出てきて、彼は壮大なビジョンを持った利他の人だと評価が変わりました。2020年12月15日付産経新聞には、政商説を覆す記事が掲載されています。

撮影はもっぱら京都の松竹撮影所で行いました。京都の撮影所が良いのは、懐の深い職人が多く、あらゆる経験、物が蔵から出てくることです。最高のプロの集まりだから、無限に引き出しがあります。それにいまだに大部屋文化があります。大部屋の役者さんたちは、新人の若い役者を引き立てる演技をしてくれます。春馬の殺陣を見て、殺陣師たちはこんなに筋がいい人はいない、と絶賛しました。

撮影現場では理屈抜きで動くことが大事です。動いてみて初めて、何が足りないかが分かりますし、どうやって演出するかもわかります。間違っていたら修正すれば済みます。結果、悪いところ、いいところが見えて来ます。つまりは一步踏み出さないと、物事は進まないようことです。いい結果を生み出すには、準備次第です。映画製作は仕込み8割、現場2割とは、現場の職人の言葉です。

私は五代のキャラを見て脚本書きをしました。日本のために若い人が動いていく姿を描こうと、現場で脚本の書き直しもしました。しかし、現場の雰囲気はよく、手直しをしても誰一人嫌な顔はしませんでした。出番が終わっても、楽屋に帰る人はなく、現場に残っていました。最後の場面間際に、五代が大阪商工会議所で、経済人に責められるシーンがありますが、あの撮影会場は職人さん達

がわざわざ作ってくれたのです。映画をより良くするには力を惜しまないのです。

春馬に五代はどんな人物かと聞くと、「忠信孝悌」の人と言いました。この言葉は両親や友人を大切にしながら過ごす、という意味ですが、それを聞いて、春馬は五代をきちんと分かっていると感じました。役を演じている役者が、自分たちが考えている以上に、役を丁寧に、魅力的

に演じてくれる。「忠信孝悌」そのものです。

五代は亡くなった時、100億円近い借金があったそうですが、これは妻が中心となって、すべて返済したそうです。五代の子どもたちは経済界の人と結婚し、その繋がりで得たお金を原資にしたらしい。

撮影が終わった時、春馬は「全てを出し切りました」と言いました。この言葉は永遠に忘れないでしょう

塾長VS田中

## 強い思いは実現する 監督になれた

### ● 春馬を抜擢してよかった

**下村** 映画づくりは資金集めが大変だと聞いていますが。

**田中** とにかくヒットしてよかった。資金提供者に、4億円を戻すことができうれしかった。

**下村** 出演俳優は誰が決めるのですか。どうして三浦春馬を主演にしたのですか？

**田中** 清潔感があり、男前の男性が欲しかった。春馬は大河ドラマに出ており、注目をしていました。出演俳優は普通、配給会社と監督が協議して決めます。リハーサルでの春馬の演技を見て、スタッフは皆、すごいと目を見張りました。春馬を主演に抜擢してよかったと思いました。新人に対しては、できないことを相方が手助けする。それが現場にはあります。監督やスタッフが、ぜひそういったシーンを取りたいと言うのなら、そうさせる。それも現場の暗黙の習わしです。主役だけでは映画はできないことをみんな、認識しています。

**下村** なぜ映画監督になろうとしたのですか？

**田中** 生れ育った北海道の日高地方の町の人口は1万人しかいないのに、映画館が2館ありました。そして田舎にもかかわらず、いつ行っても立ち見していました。こんな世界があるのだと、子どもの頃の憧れでした。

**下村** 強い思いは実現するということですかね。ところで次回作は何ですか。ロダンの妻のハナコはどうなりましたか？

**田中** ハナコを日仏合同で作りたいのですが、コロナの影響でできていません。今は、三重県の真珠養殖者をめぐ



映画製作現場の裏話を披露する田中監督

る喜劇を手掛けています。超高品質の真珠が家の中から出てきて、それをどうするのかを争う笑いの作品です。もう一つは「北の流氷」。開拓によって砂漠化した日高・襟裳を再び、豊穡の地にしようとする取り組みだ先人たちの努力を描く作品です。現在はスポンサーと交渉中です。



トークショーは次のような濱田総一郎・「生き方塾」副塾長の言葉で閉会しました。

**濱田副塾長** 私は鹿児島出身なので、五代たちの活躍は知っていました。幕末、私の故郷のいちき串木野市から、幕府には無断で薩摩藩の19人の若者がイギリスに留学しました。その中の一人が五代です。彼らは日本の基礎を作った人物です。映画を通じて薩摩の気風を再認識でき、郷土の偉人たちの働きぶりを広く知ってもらうことができました。監督に重ねてありがとうございます。